筑紫女学園大学リポジト

An Investigation of Chinese National Consciousness and Yunnan’s Present Situation in China

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-02-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 崔, 淑芬, CUI, Shufen
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/213

中国における民族意識と雲南省少数民族の現状に対する一考察

崔　　淑芬

An Investigation of Chinese National Consciousness and Yunnan's Present Situation in China

Shufen CUI

はじめに

近年、中国では国民統合、国家統合をより促進、そして統一した民族意識を高めるために、「中華民族論」が展開されている。これに対して、文化的アイデンティティを持つ民族という概念及び「民族学」への再検討という声が高まっている。

従来、中国の西南地域における少数民族に関する研究は、西南部、主に雲南・貴州・四川に比重が置かれ、民族の変遷と現状、生業や経済・政治的状況の変化、周辺民族との社会関係、人口変動、各少数民族の市場経済への適応の過程や多様性を中心とした研究、また、民族・歴史をめぐる、考古・神話・民話・言語・美術などの研究が多かったのである。一方、少数民族の歴史、社会、文化に関する研究はかなり進んできたが教育研究は最も遅れている分野であるといわざるを得ない。

筆者は、少数民族地域における民族教育の実態を明らかにするため、昨年の夏休みに、少数民族教育における言語・文字教育や多文化共生のための教育に焦点を当てながら、雲南省の大理・麗江の少数民族及び雲南民族大学（注１）雲南民族専門学校などの調査を行った。

本論は、実験的な試みによって得た経験自体を資料として、文化的にも言語文字的にも顕著な民族化を示している雲南省における多民族、特に、ナシ（納西）族の民族意識の動態に焦点を当て、トンパ文字の伝承活動に注目しながら、その変遷の要因となる社会的背景を明らかにし、実地調査と歴史文献とを組み合わせ、多様なアイデンティティを抱えて生きる中国少数民族の文化・教育の視点から、多民族国家におけるアイデンティティがどのようなものかを読み解こうとした試みである。

一、中華民族多元一体論

中国で社会学・民族学の権威として大きな影響力をもつ費孝通は、1988年に、「中華民族多元一体の構造」、言わば「多元一体論」という概念を提示した。これは中国の民族政策に大きな影響を与えただけでなく、国内外の学界でも広く関心と討論を引き起こした。

費孝通は長期にわたって民族学の実地調査と研究に携わってきたと同時に、少数民族地区の経済と社会文化事業を発展させるという課題を強調した。一方では、有名な「中華民族多元一体構造」理論を提唱した。「中国の諸民族のあり方は多元的であると同時に一体であり、自然発生的だった中華民族は列強と対抗する中で自覚的な民族実体になった」、との論点を示した。（注２）

費孝通は現代中国の社会学、社会人類学、民族学の創始者とよばれている。彼はイギリスで哲学博士号を取得した後1938年に帰国し、雲南大学社会学系にて教鞭を執る。45年後、清華大学教授、中央民族学院人類学教授などを歴任した。その間、同氏は貴州省の民族識別に関係ある調査と研究に参加し、「中国多民族関係の構造における民族融合の程度の違いや、混じりはしてもひとつにはならない多くの現象に、より多くの注意を注ぐように」、と強調した。各民族間の関係をはっきりさせるため、民族史の研究方法と視野の問題を取り上げたのである。（注３）

その後1951年～1952年民族地区への中央訪問団に参加、1956年～1957年には雲南少数民族地区社会調査を指導し、少数民族識別に理論・実践面での貢献を果たした。80年代以後、中国社会科学院社会学研究所所長、北京大学社会学部教授、社会学研究所所長などに就任した。1982年英国ロンドン大学経済政治学院より栄誉院士の称号を授与され、88年に、米国ニューヨークにて大英百科全書賞受賞、1993年、福岡アジア文化賞を受賞したのである。それ故に、中国の社会学者、人類学者、民族学者とよばれ、中国の社会学と人類学の基礎を創った一人、と高く評価された。

費孝通は、自らの学問をフィールドワークの基礎の上に立ててきた人類学者として、可能な限り少数民族の基層社会を繰り返し歩き回ったのである。（注４）

1988年11月、費孝通は香港中文大学の招きに応じて「中華民族の多元一体構造」という有名な講演を行った。「中華民族とは、中国領域内の56民族の民族実体であって、56民族の総称ではない。つまり中華民族の一体感は、普通の民族一体感より一段上のレベルのもので、いわば中国領域内に住む諸民族は二重のアイデンティティをもつこと、中華民族の基本構造は諸民族が分散した多元状況が一体化するプロセスが重要で、中国の複雑な多民族関係の歴史と現実はともにこの構造の中で理解すべきである。多元一体化構造は中国の歴史が長期にわたって発展してきた結果である」、と論じたのである。（注５）

費孝通の民族論の特徴については、「我々は漢民族の形成についていまだに学問的な説明ができないでいるが、この民族が現在世界で最も人口の多い民族になったのは、決して漢民族の祖先の自然な繁殖の結果ではなく、中国の歴史が発展する中でもともと漢民族ではなかった人々を吸収してこのように大きくなったのである。他の民族で、実際にもともと異なるアイデンティティをもった人々が次第に融合して形成されたものも多い。融合があるのに対して分化もある。絶え

ず分かれたり合したりしながらわが国の現在の民族構造が現れたのである」（注６）と述べていたのである。そこからみれば、費孝通の民族の認識は、中華民族という総体は、多くの、互いに離れることのできない民族から成り立っている。総体を形成している各部分の関係は密接で、分けることはできないが、均一的なものでもないことを強調しながら、現況の調査と歴史研究を通し、実際の国情に深く基づくべきだと主張しているのであった。

次に、多民族、多文化融合されている雲南省を取り上げて、その文化の多元的な現象、特徴及び伝統文化の振興を分析してみる。

二、多民族の雲南省

雲南省には漢族の他に、イ族、ペー族、ナシ族、ハニ族、タイ族など26の民族があり、中国においては、最も民族が多いところである。

雲南省の民族と言語一覧

民　族	言　語	民　族	言　語
納西（ナシ）	チベット・ビルマ語	傣（タイ）	タイ語
傈僳（リス）　拉祜（ラフ） 彝（イー）　基諾（チノー） 哈尼（ハニ）	イ語	阿昌（アチャン） 白（ペー）	ビルマ語
徳昂（ドアン ） 佤（ワ・アワ） 布朗（プーラン）	ワ・ドアン語	壮（チワン） 布依（ブイ）	チワン・タイ語
苗（ミャオ）	ミャオ	怒（ヌ―）、	ヌ―語
瑶（ヤオ）	ヤオ	満（マン）	満州語
景頗（ジンポ）	ジンポ語	蒙古（モンゴル）	モンゴル語
蔵（チベット）	チベット語	回（カイ）	アラビア語・ペルシャ語
独竜（トールン）	トールン語	普米（プミ）	チャン語
水（スイ）	トン・スイ語		

多民族言語と社会構造をもっている雲南省は歴史的に居住する民族集団数が全国では最多の地域であり、文化的多様性や人口規模の小さな民族集団の多様さが特徴である。

同省は８地級市と８自治州12市轄区、９県級市、79県、29自治県を管轄する。ところで、自治州という名称は、中国の行政単位のひとつで、省クラスと県クラスの行政レベルの中間で、少数民族に自治権が付与された地区クラスの行政体である。中国の少数民族の自治行政体としては省クラスの自治区や県クラスの自治県、さらに下級の自治郷もある。

雲南省の面積は38万ｋ㎡、東部は石灰岩台地で、カルスト地形の深い峡谷を川が流れる景勝地であり、西部は山地でサルウィン川とメコン川が流れる。鉱物資源に恵まれ、錫・亜鉛、鉛、カ

ドミウム、インジウム、タリウムの埋蔵量は中国最大で、ほかにも鉄、石炭、銅、亜鉛、金、水銀、銀、アンチモンが豊富にある。雲南省の降水量は中国平均の４倍で、水力発電が盛んである。地理的位置からみれば、中国西南の果て、南はラオス、東はミャンマーと国境を接し、山地が多く、全省面積の84％を占めている。（注７）雲南の地は古くから重要な南部の重鎮として中国とインドを結ぶ西南シルクロートが通る重要な交通路であった。

以下、大理のペー族と麗江古城のナシ族（納西族）を取り上げ、民族の多様性と特徴を分析してみる。

1、大理のペー族

古代には中国の勢力が雲南に浸透して郡県が設置されたこともあった。西暦２世紀に、漢の武帝が蒼山・アル海湖地区に郡県を置いた。８世紀頃、この一帯には前後して彝族、ペー族の先住民を主体とする奴隷政権「南詔国」とペー族を主体とする封建領主制政権が現れた。３世紀の晋代には再び後退し、諸民族が分立した。８世紀半ば頃、雲南の洱海地区（現代の雲南省大理）には六詔と呼ばれる政治権力があった。詔は王を意味するタイ語、チャオ（このチャオという言葉自体、中国語の「主」の借用語であるとする説もある）に関連すると考えられるが、彼らは烏蕃と呼ばれるチベット･ビルマ語族であった。六詔中の蒙舎詔は南部にあったことから南詔と称し、最初、唐に朝貢したことが記録されているが、752年、南詔は雲南西北部に勢力を延ばしていた吐蕃と同盟し、四川南部を攻略した。南詔は苴咩城（現・雲南省大理）に遷都、大理はこれ以降南詔・大理の定都となった。794年、唐の使者が南詔の都に到来し、洱海ほとりの蒼山で会盟の儀式が行われた。これによって南詔と唐の関係は強固となり、南詔は成都に子弟を留学させるようになる。その後、唐の僖宗は、南詔を懐柔するため、ついに公主（皇帝の娘）を南詔王隆舜に降嫁させた。以後、大理はモンゴルのクビライに征服され、元の雲南行中書省が置かれた。清代に雲南省が成立した。

南詔国と大理国の中心地として繁栄した当時の面影を残す古都大理は、歴史ある町並と、白地の衣装に赤やピンクの刺繍、冠のような大きな頭飾りが特徴のペー族人が殆んどである。ペー族の名称については、漢語では「白族」と呼んでいる。それは、未婚女性が頭に巻き付ける白い羽根飾りが特徴的だからであり、民族名の由来となっている。漢籍史料には、白人、擺人などと記され､民家とも呼ばれたからである。漢族からは｢白人｣､｢民家｣などと呼ばれていた。今日のペー族（白族）は、人口1,858,063人（2000年の統計）、約80％が雲南省大理ペー族自治州に住んでいる。ペー族は以下検討するナシ族と同じ、チベット・ビルマ語群に属している。その由来としては、漢籍史料によれば、ペー族は古代羌人を祖先に持つと言われる。早期に雲南へ南下してきたチベット騎馬牧畜文化と､タイ系の水稲耕作文化の両方を受け入れ､さらに､漢文化とも接触して、唐王朝時代の南詔国や、宋王朝時代の大理国の中核をなし、フビライ率いるモンゴル軍に滅ぼされるまで300年間｢大理国｣として栄えた。1956年には､大理一帯のペー族居住民地区が統合され、大理ペー族自治州が設立される際に、正式に白族の名も定められた。

これらの民族歴史によって、独特なペー族の文化や宗教、建築芸術が生み出された。言語面から考えると、チベット・ビルマ語派のペー語を使用している。ペー語を、漢字を借用したり、漢字の構成方法を応用して作った漢字風の文字を組み合わせて記述したり、借用語として多くの漢語をペー語に取り入れている。文法的にも漢語の影響をうけ、基本語順が漢語と同じSVO型になっている。現在では「大本典」という音曲芸能の台本などに用いられている。

宗教においては、各集落には、山神などの自然神や英雄神などを守護神とした本主と呼ばれている産土神（うぶすながみ）が祀られ、集落あげての祭りが毎年行われている。また、漢民族の影響を受け、竈、土地などの神々をあらわした木版画を持ち、春節（旧正月）などに廟前などで売られている。６月25日に行われる豊作を祈願する火把節などの伝統行事が特に盛んである。三月街は、大理で1000年以上も続く祭り。別名観音節とも言われ、毎年旧暦３月15日に始まり期間は１週間。近郊からも少数民族が集まり、大変にぎやかなバザールである。龍踊り、競馬、掛け合いの歌合戦などが行われる。

建築の特徴としては、大理の街は、洱海という大きな湖と蒼山連峰の間に挟まれ、周辺は田園風景の広がるとても美しい所である。ペー族の民族建築には、白族の伝統民居、井幹式住居、石造住居、院落式住居がある。その建物は、白壁と青い瓦で、典雅なデザイン、「雅」を主題とした精微で美しいのが特徴である。院落式住居は白族民居の中で一番多く、漢風坊院とよばれている。漢風坊院は、白族の伝統居住と漢の時代の伝統住居を結合したもので、白族の漢化とあわせて形成されたものである。その住居の配置は三坊一照壁が多く、色鮮やかな彫刻が施された“門楼”がある。

2、麗江古城のナシ族（納西族）

麗江は世界遺産（1997年）の街で、大理と並ぶ、雲南で最も有名な観光地であり、そこに暮らしているのがナシ族である。

麗江は古来、四川省から雲南省の北部町の大理、保山、ミャンマー、インドなどへ向う南西シルクロード線が通る交通の要地であり、雲南省南部町の思茅から大理、ラサ、ネパール、インドへと続く茶馬古道への乗り換え場所でもあった清の時代からは、チベットとの貿易が大きく発達し、麗江現地商人と外来商人が古城に店舗を出すようになった。（注８）

麗江古城は、ナシ族の王都として宋代の終わりごろから元代初期の13世紀後半に建設された。古城は、中国の一般的な古城にある城壁に囲まれていないのが大きな特徴である。古城の四方街など主要な道の両側にあるこれらの店舗は、当初から商業貿易と住宅との二つの機能をもつものとして建てられていた。伝統的に、道に面する側は商店か生活雑貨などの手造り工房として使用され、その反対側は住宅として使用されていた。旧市街（四方街）には「三房一白壁」の四合院であるナシ族独自の民家が1,000戸以上も軒を連ね、縦横に伸びる石畳の道と網の目のような水路によって仕切られ、自然景観と調和した美しい街並みを形づくっている。

ナシ族は、自称は納、ナシ、納汝、納恒で、「納」は 黒、「西」は汝、「恒」は人、または族を

意味する。雲南省西北部から四川省西南部にかけての海抜高度1,000～2,000メートルの山間丘陵部や、壩子と呼ばれる山間低盆地に居住し、四川省南部やチベット自治区東部の茫康県にも一部分布する。1961年４月10日、麗江ナシ族自治県が成立された。今の民族自治区域としては麗江市に所属する玉竜ナシ族民族自治県があるが、麗江市の中心部である古城区にも多く居住している。中国内のナシ族人口は約32万人であり、ナシ族は農業を主とし、水稲、トウモロコシ、ジャガイモ、小麦、豆類、綿花、麻を栽培している。金沙江両岸は森林地帯であり、玉竜山間地帯は植物の種類が多く、植物の宝庫とたたえられている。

ナシ族の歴史によると、元来、黄河地帯に住んでいた古代羌人であり、８世紀、現在の青海省付近から南下してきたと言われている。南下した当時は磨些詔と呼ばれる小国を建国していたが、唐により蒙舎詔に編入された。10世紀、ナシ族は大理国の管理下に置かれた。1274年、元朝政府は「麗江路軍民総官府」を設置、「麗江」の名はこれより始まった。元朝から清朝にかけ、直接ナシ族地区で中央王朝管轄下の世襲土司制度を遂行した。（注９）土司は中国王朝が、中国に隣接する諸民族の支配者たちに授ける特定タイプの官職に対する総称であり、この土司制度は、元・明・清の時代の西南地域の少数民族の首領、そして世襲制の官または、官職を授けてその地の庶民を支配させた制度。清においては、さらにこれらを区分し、軍事指揮官の称号を受けた者たちを土司、州・県の知事職を受けた者たちを土官と呼ぶ。なお、土司・土官における「土」とは土着の意で、先祖伝来の所領において世襲でポストに着くことを指す。

当時のナシ族木徳土司が積極的に漢文化を取り入れたために、社会組織から冠婚葬祭に至るまで、その影響を大きく受けた。そのため、ナシ族中には、漢語を話せる者が多い。姓に関しても、支配層は木、一般の人々は和を名乗ることが多い。

一方では、明、清朝で「改土帰流」も行われた。これは、主に西南地区を中心とする辺境統治政策の一つである。改土為流ともいう。これは少数民族の土官を改めて一般の州、県、道、府、を建てることを指している。明朝ではこれらの地域に通常の地方行政制度を実施せずに「土州・県」を設置した。清朝でも明の制度を踏襲して、各部族の族長を土州・県の「土官」に任命して、土官の下での自治を許し、それを中央派遣の官僚が監督した。これらの土官は世襲も認められる文官であるが、一方、部族を率いて来帰し、戦功のあった族長は武官である「土司」に任命された。明の制度を踏襲した清朝は、やがて土官、土司を廃止して通常の地方行政に編成し直した。この土官、土司を「品流官」すなわち正式の官僚とすることを改土帰流という。

麗江は「改土帰流」されたことによって、ナシ族地区に重大な社会矛盾と文化の変遷、伝統文化の衰退をもたらした。

社会、家族形態においては、多様で、独特な特徴をそなえている。

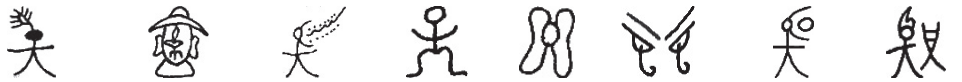
麗江地区では一夫一婦制の父系家族が一般的で、ふつう二、三世代が同居するが、瀘沽湖周辺地区のナシ族には、三種類の家族婚姻形態がみられる。第一はより伝統的な形式である母系家族で、全体の60パーセントを占める。この家族の系譜は母方を通じてたどり、財産も母系を通して継承し、家族の成員は「阿注」という一種の妻問い婚姻生活をするのが一般的である。家族は祖

母とその兄弟、母親とその兄弟姉妹、子供から構成され、子供の父親は別の母系家族の成員に留まる。第二はナシ族文化と漢文化との折衷形式である父系と母系が並存する家族形態である。女阿注が男性の家に来て同居するか、男性が女性を嫁に迎えるかして家族が形成され、この種のものは全体の約30パーセントである。このような家族の系譜は、女阿注が男性の家に来て生まれた子供と正式に娶った女性の子供は父系をたどり、男方の嫁いでいない姉妹が生んだ子供は母系をたどる。第三は漢化された形式である父系家族で、約10パーセントを占める。基本的には母系血統の成員を排除し、一般に一夫一婦制の家族である。

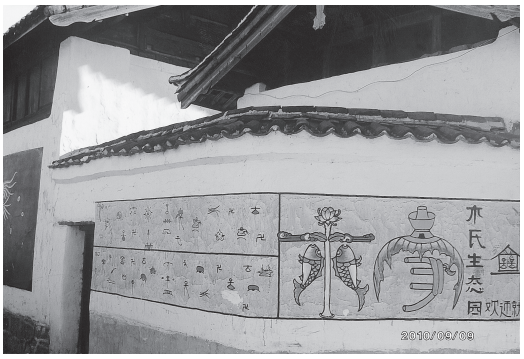
それによって、畑の仕事も主に女性が従事している。麗江一帯に住む女性は、普通はみな単衣の長衣を着ている。広袖の腰まわりのゆったりしたもので、上にチョッキを重ね、腰に襞のたくさんはいった前掛けをしめ、ズボンをはく。淡い色のスカートをはくものもいる。背には羊皮の肩掛けをはおる。肩掛けの中央にはみごとな北斗七星が、両肩には太陽と月が刺繍されていて、「七星、日月を伴なう」を象徴している。それはまた「朝は星の光に照らされ、夜は月の光を戴き」「日出でては働き、日入りては息む」という働く女性の勤勉な生活を反映するものでもある。

宗教においては、トンパ教はナシ族が普遍的に信仰する宗教で、その巫師が「トンパ」と呼ばれることからこの名がついた。信仰の内容からみると、トンパ教もその他の原始宗教同様、アニミズム、霊魂不滅を信じ、祖先を祭祀する。トンパ教では多神を信奉しあらゆる自然現象や自然物をすべて神霊とみなす。これらの神霊は人間世界の一切の事物を支配し、人に福をもたらすだけでなく、人に祟りもした。人々は犠牲をささげてこれらを祭り、災いから逃れるよう祈るだけで、対抗する力を持たなかった。また、トンパ教は発展形成の過程において外来宗教の影響を受けており、形成当初とは大きく変化している。信奉する神々や宗教儀式などの面でラマ教、仏教、道教の多くのものを吸収したが、その中でも特にラマ教の影響が大きい。ナシ族の人々の生活習慣との関係では、婚姻儀式や成人式、葬式などに深く関わっており、ナシ族の人々の風俗、生活慣習の各方面に浸透している。普遍的に、多くの神を祭るトンパ教を信奉してきた。旧暦２月の「サンド節」と旧暦６月のたいまつ、「火把節」がナシ族伝統の二大祭り。サンドは玉龍雪山の主神で、麗江一帯の人々はサンド節にはサンド神を祀る玉龍雪山の麓の玉峰寺を訪問する。たいまつ節は、高さ1.5メートル、太さ30センチほどに縛られた木片の束が、赤や黄色の花できれいに飾られ、日暮れと共に各家の門で次々と点火される。家族が静かに見守る中、ゆっくりと燃えるたいまつの炎が水路に映える様子は風情がある。これらの行事を行うトンパは、ボン教の要素をもつ固有のトンパ教がトンパと呼ばれるシャーマンによって伝えられ、トンパが春節の祭天などの伝統行事や葬式を仕切る。トンパはトンパ文字の中心的な伝承者でもあった。

トンパ教の文化についてやはり欠かせないのがトンパ文字である。西暦７世紀に現れたトンパ文字は、約1,200～1,300字あるといわれている。現在、世界でわずかに残され、まだ使われている象形文字である。一見したところただの絵のようである。しかしよく見ていくと、その中にはナシ族の民俗や麗江の自然をもとに造形されているものがあり、人々に様々なことを語りかけているような気がした。



ナシ族　美しい　歌う　踊り　耳　泣く　食べる　母



民家の壁に描かれたトンパ文字

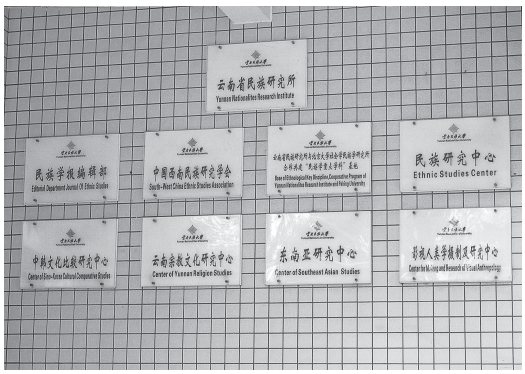
働いているナシ族の親子

働いているナシ族の女性

麗江の古城

ペー族の女性

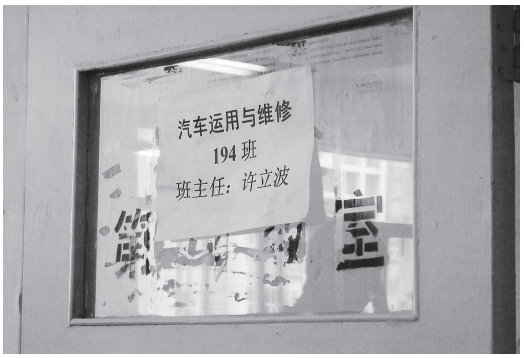
雲南民族大学



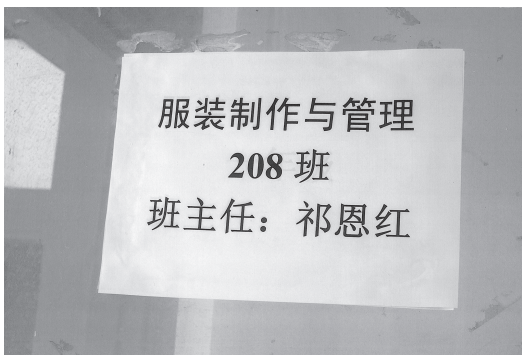
民族文化研究多部署を訪問

授業見学・取材後

民族専門学校



車修理学科教室



服装製作と管理学科教室

授業参観・取材後

トンパ文字は、絵文字から象形文字への過渡期にあるものともいえる。またトンパ文字はトンパ教の必要に応じて創られたともいわれ、トンパ教の経書はトンパ文字で書かれ、中には信仰や歴史、文学などについてのことが書いてあり、それらはナシ族の貴重な資料となっている。また、文学芸術も発達しており、彫刻、絵画、音楽、舞踊などにもトンパ教の宗教的彩りが見られる。麗江図書館に現在保存されているトンパ経は約5,000冊にもおよび、かつては25,000冊あったとされているが、その半分以上は海外に流出してしまったといわれている。トンパ経は口伝が多いため経本だけでは理解することが難しいが、その内容は宗教的なものにとどまらず、地理、動植物、神話、食文化、服飾、生活、農牧業など多岐にわたっている。（注10）トンパ文で書かれた「トンパ経書」は、ナシ族の社会発展の歴史を研究するための貴重な資料である。

この祭祀者が儀式を行う時に使われるトンパ経典は縦10cm、横30cmほどの経本で、木の皮のように厚く丈夫な用紙が使用され、長い保存にも耐える。そしてトンパ文字は、竹を細く裂いて作った筆記具でその用紙に記されていく。文字は左から右に読み、動物、植物など様々な象形文字、トンパ文字が使われている。今ではすべてを正確に読みこなせる人が減ってきたので、雲南省社会科学院「麗江トンパ文化研究所」で残り少なくなったトンパの協力の下、解読・記録作業が行われている。トンパ文字は、隣接する他民族の文字の影響を受けながらも、その独自性を決して捨てることはなかった。しかも、他民族の文字をうまく利用して表音文字も作り上げてしまうなど、意思伝達を洗練させるための工夫も怠らなかったのである。また、仏教が伝わる以前にチベットで広く信仰されていて、ラマ教にも影響を与えたボン教の原型を保持していることなどから、トンパ経典はチベット密教に関心を寄せている人々の注目を集めている。

遠く欧米から中国の「秘境」を訪れた人たちがトンパ文字を発見し、関心をよせていた。

1867年、フランス人宣教師のP・デゴダン（P. Desgodins）が、ナシ族の宗教者であるトンパが書いた経典の複写をパリに紹介した。その後、雲南の麗江から同様の経典を西洋へ持ち帰り、欧州では高い値で売買された。このようにしてやりとりされた経典の一部は、イギリスの大英博物館でも展示され、大きな反響を呼んだ。その後、アメリカのJ・F・ロック（J. F. Rock）を中心にトンパ経典の翻訳なども進められ、研究のレベルでも注目を浴びるようになった。中国国内においても、1930年ころから本格的にトンパ文字の研究が行なわれはじめ、大きな成果がもたらされた。

以上の宗教や生活文化を見てもわかるように、ナシ族は他民族の文化を吸収・同化して自分たちの文化を作り上げていく才能を持っており、トンパ文字にも同様のことがいえる。トンパ文字にはナシ族の自然と一体化した素朴で、またユーモラスな雰囲気を感じる。そしてこの文字が、姿を変えずに今も中国の奥地に現存するのは、その文字がトンパという特殊な宗教文化の中でのみ通用する文字であったからであるといえる。トンパの伝統とともに、トンパ文字は守られてきたのである。ナシ族は自民族の発展において、燦然と輝く民族の文化を作り出した。

一方では、今日において、トンパ文字、文化を保護、継承することは当面の急務である。民間から政府まで、「トンパ文化を救おう」「ナシ民族文化をその民族に戻そう」という方針に基づいて、

トンパ経典の校訂、トンパ文字やトンパの経典・伝統的な葬儀・文化に関するものを展示するための「トンパ博物館」の開設、また、「トンパ文化学校」の創設などに多大な力を注いだのである。

三、伝統文化の振興

1、トンパ文字・文化

麗江はその自然や世界文化遺産となった古城によって知名度が高まり、世界から注目を浴びている。ナシ族文化として最も知られているのは、トンパ文字である。トンパ文字は象形文字の一種である。ナシ語表記に用い、異体字を除くと約1,400の単字からなり、語彙は豊富である。現在、世界唯一の生きた象形文字とされている。(注11)

トンパ同士の間で代々継承されてきたため、社会全体での標準化がなされておらず、異体字も多い。また、口語をそのまま書き記すものではなく、内容も宗教や伝承に関するものが多いため、真の意味で理解するのはとても難しいとされる。主に毛筆で書かれる。世界の文字の中でも唯一色によって意味を変えうる文字であり、黄色はお金（金持ち)、黒は悪などの意味合いを既存の文字に色をつけて字の意味を広げていく。

絵文字に近い独特の象形文字で、単字の構造は古代中国の甲骨文に類似する点もあるが、文字に込められた民族的な意味合いなどは同じ意味の文字でも異なる場合が多い。例えば「天」を表す文字の場合、甲骨文字の天は下界とは切り離されたものであり、いかなる感情も持たないとされている。しかしトンパ文字の天は、優しく力強く世界を覆うといった意味を持っている。ちなみに、トンパ文字の「女」は同時に「大きい」という意味を持ち、「男」は同時に「小さい」という意味を持つ。これはナシ族文化が伝統的に母系社会であることに由来する。

トンパ文字で作成された古代ナシ族の百科事典ともいえる宗教典籍「トンパ経」が残されており、2003年にはユネスコの世界の記憶事業に登録され、デジタル保存が進められている。麗江は世界遺産に登録されたあと、中国内外から多くの観光客を集める観光地にトンパ文字は現在も宗教的に使用され、原始仏教に最も近いとされてユネスコ世界の記憶に登録された。

ナシ族にはもともと２種類の文字があった。ひとつは表意の象形文字で、トンパ文と称され、ひとつは表音の音節文字で、哥巴文と呼ばれている。1957年に、ローマ字を基礎とするナシ表音文字が作り出された。一方では、トンパ文字、本来、トンパ祭司が宗教においてのみ使用する文字であり、しかもトンパ祭司が司ってきたトンパ教は、厳密な組織性をもたない宗教であり、寺院や教会のような特定の場すらもたない。トンパ教の宗教における活動は、人々の求めに応じて各家庭にトンパが訪れ、行事を行う形式になっている。(注12) 前述したように、トンパ経典には動物や植物など様々な象形文字が描かれており、特に多種多様な悪鬼とそれを鎮める力を持つ神々が印象的である。何種類かの象形文字辞典が作られている。一つの文字の発音と意味はわかるが、省略された部分が多いので、それぞれの文字を正しく読んでいっても、意味のある文にはならず、内容は把握出来ない。記述内容を正しく理解するには、その経典に描かれている内容を

暗唱していなければならない。要するにこの文字は、トンパたちが儀礼の場で経典を間違わずに暗唱するためのメモ書の役割をしていた。しかしそれと同時に不可思議な記号により、儀礼を権威付ける役割も果たしていた。現在、すでに一般のナシ族の人々からは忘れ去れられた過去の宗教慣行になりつつあるため、この文字を読める人が極めて少なかったのである。1970年以来、トンパのあいだでも、トンパ文化、とりわけトンパ文字で書かれたトンパ経典が歴史的に重要な意味をもつことが理解され、老トンパ達は「トンパ民族の自存戦略や、さらに経済発展に結びつく新たな道を開くため、トンパ文字、トンパ文化の振興活動をしなければならない」と主張した。やはり、民族的マイノリティの権利保障の中で、現在トンパ文化は、ある一定の学術世界にあって神秘的な関心を引き付けているが、そうした学術の領域から取り出して、民間に返す、民族語の使用や民族文化、歴史の継承を目指す民族教育は重要な要素である。(注13)

2、トンパ文化の振興活動

民間におけるトンパ文化の振興活動については、ナシ族人は、自ら店を開き麗江古城に出店し、麗江の定番土産である木彫のトンパ文字木盤やトンパ文字織物、トンパ文字Tシャツ、トンパ書道・絵画作品、トンパ工芸美術の作品などを作り、地元の観光記念品として、観光客に勧め、これによって、トンパ文字、文化が麗江の観光文化市場に進出すると共に、ナシ族の文字、文化も国内外にアピールすることが出来た。

このような活動は、中国政府の「地域経済を発展させ、トンパ文字の広範な使用を推奨する」という方針に基づいたことである。現在トンパ文字は、とくに観光地の土産品に用いられ、それらは観光客が集まる古城で数多く販売されている。また麗江ナシ族のイメージとして商店の看板や道路標識、さらに名刺などにも用いられている。つまり観光業によって、トンパ文字に新たな役割がもたらされたといえる。また政府はトンパ文字を単に経済発展と結びつけるだけでなく、ナシ族のあいだに積極的に普及させる施策を実施している。これは、トンパ文字がナシ族人に新たなアイデンティティーを付与する重要なシンボルとみなされつつあることを示している。ナシ族の人々の努力により、民族文化と観光がバランスよく結びつき、トンパ文化の振興、そして麗江地区の発展に寄与している姿をそこに見た。(注14)

一方では、政府、地域において、トンパ文化の振興活動は、主に、トンパ経の収集、整理と研究、また、トンパ文字と文化を学校の授業科目として導入し、承継者を養成するという両面から始まったのである。

1979年に、麗江で「トンパ経翻訳小組」が設けられ、1981年に、雲南省人民代表委員会が「トンパ文化研究室」の創設を認め、麗江地区と雲南社会科学院の二重管理形式で運営された。1991年には、「雲南社会科学院トンパ文化研究所」と改称され、現在に至っている。

また、北京中央民族学院が麗江地域において、1,000冊のトンパ経典や関連する文物が収集、研究されている。

1995年、トンパ文字と文化の伝承者をつくるため、麗江トンパ博物館はトンパクラスを設置し、

ナシ学研究会も作られた。彼等は「トンパ文化の振興には、トンパの育成が鍵を握っている。また、トンパ文化生態保護区の設置、トンパ経典による婚葬の儀式の再開、トンパ文字の普及なども当面の急務である。」と強調したのである。

ここでは、前述したように、麗江トンパ博物館はトンパ文化を振興させるため、先頭に立って、トンパ文化の学校を創設した。その学校は不定期に学生を募集し、トンパ文化に興味ある人なら、誰でも申し込むことができる。設置された授業科目は、ナジ族象形文字・トンパ経典・トンパ文化概論・ナシ族史・トンパ儀式及びトンパ工芸・トンパ舞踏など七つである。その教科書としては、『ナジ族象形文字』・『ナジ族伝統祭祀儀式』・『ナシ象形文古籍』・『ナシ族伝統工芸』などになっている。教授方法については、なるべく伝統に近い方法がとられ、トンパ経典の暗誦や筆記、また、トンパ教によるトンパ婚葬儀式を試す実地訓練も行われ、トンパの後継者養成にあたっていた。2003年、３万巻1,800種類に及ぶトンパ経典のうち、主なものに英文要旨・国際音標・漢語の直訳、意訳をつけた。『ナシトンパ古籍訳注全集』100巻が無形の記憶遺産として、世界遺産に登録された。

麗江トンパ博物館はトンパ文化学校を設置した他に、1998年に「麗江ナシ文化研習館」も設立した。この研習館は、麗江金山郷貴峰行政村三元自然村に位置し、トンパ儀式の踊りを中心にナジ族伝統祭祀儀式知識を教えている。また、「女性トンパ文化学習班」という専門のクラスも設け、伝統的に男性のものであったトンパ文化を女性が学ぶこともできた。彼女達の中には、この学習班で学んだ知識をいかして、トンパ文字に関わる土産物専門店を経営している者もいた。

このようなトンパ文字・文化の伝承活動は、ナシ民族のあり方において、トンパ文字の伝承活動が、経済的な効果から派生した「イメージ戦略」として実施されている点にある。ナシ族におけるトンパ文字復興運動的な変容によって活発化することとなった。宗教的な目的より、観光資源の掘り起こしという課題が最優先となったことによって、トンパ文字はもとの宗教の基盤から新たな社会基盤を獲得したのである。

いずれにせよ、トンパ文字や文化がこの地域及びナシ族のイメージを高め、経済的な効果を生み出すこともできた。

3、学校教育への導入

学校教育へのトンパ文字や文化の導入については、20世紀の50年代から政府により既に始まった。1957年、政府はアルファベット式ナジ文字草案が作られ、一部のナシ族小学校教師や幹部の間で推行することを試みたが、1958年には中止された。というのは、中国における自治区域の基本的枠組みは、1958年までに出来上がったからである。つまり建国意図は自治区域の画定とならんで建国当初もっとも重要な民族工作が民族の確定、いわゆる国家による民族の「発掘」と認知であった。故に、1958年代までは民族平等政策、民族の発掘・認知工作、言語や文字などの創造の文化政策、穏やかな社会改革が行われたが、それによって辺境住民を新政権に引きつけ、民族的融和をある程度実現することができたのである。しかし、50年代末頃の反右派闘争を契機に急進的な民族政策がとられ、58年大躍進期には辺境地域の経済統合が、文化大革命期には辺境防衛

が最優先されたが、民族政策は骨抜きになり、文化大革命の時期には民族工作自体がなくなってしまった。（注15）

80年代からは、「四つの近代化」への移行により民族工作が復活した。さらに、改革・開放が進むにつれ民族や宗教のリバイバル現象が誕生し、辺境地区は新たな時代を迎えることとなった。民族理論においては、今後の民族政策を次のような内容で提示している。

① 民族区域自治を実行して、諸民族の民主と平等、団結を強固にする

② 諸民族間の政治・経済・文化面での「事実上の不平等」を一歩一歩解消していく

③ 民族の違いを認め、民族の特徴を重んじ、民族矛盾を正しく処理する（注16）

とりわけこの時期の民族政策は、基本的には比較的穏健であったが、トンパ字草案が修訂され、「ナシ文字方案」が定められた。そこで、麗江教育局が主導する学校教育における、トンパ文字の伝承活動はナジ族の伝統文化の伝承が目的とされ、言語教育と連続してトンパ文字の指導が行われてきた。ナシ語の伝承、教育の再開により、漸くトンパ文字教育を実施する環境が整えられた。教育局は本格的にトンパ文字・文化の小学校教育への準備を進める。先ず麗江ナシ文化研習院をその準備作業を行う機関に指示し、トンパ文字に関する授業の計画や教師の派遣計画の作成を依頼した。教師には麗江文化博物館や雲南省社会研究院トンパ文化研究所の研究員などが非常勤で担当することになった。

1998年９月に興仁小学校でナシ語の教育課程への導入を試みた。この際、教育に用いられた表記法は80年代から試行されたアルファベットによるものである。翌年、黄山小学校が二番目の実践学校として学校授業でのナシ語の教育を始めた。

2003年に、トンパ経典は「世界記憶遺産」に申請され認可された。この「世界記憶遺産」については、ユネスコが1993年から「世界の記憶プログラム」を実施したものである。これは歴史的に貴重な文献遺産、手稿・文献・口伝・写真などを散逸や汚染から守り、保護するという国際宣言である。保護の対象となる文献遺産は「世界記憶遺産」として登録され、世界の記憶プログラム」の特定標識を使用し、一定の基金によってデジタル保存されている。（注17）つまり、トンパ文字及び文化の価値が一般的に認められるようになった。同年、中国政府と教育機関もトンパ文字及び文化を麗江の教育機関に全面的に導入することを定めた。その導入については、「ナシ言語を推進し、生徒にナシ象形文字を習得させると同時に、ナシ伝統の手芸・民族舞踏・民謡・童謡・民俗・礼儀なども学習させ、その上、ナシ族の歴史も教え、良好なナシ言語環境を作ろう。」と、「麗江市古城区教育局ナシ文化伝承方案」により定めた。こうしたナシ文化を全般的に学校教育に導入するという目標のもとに、ナシ民族語・文化教育のため、専門の教員の養成、研修が実施された。ナシ語教育を実施する学校も53校にまで増えた。現在、トンパ文字の指導が小学校のほか、中学校および昆明の専門学校や民族学院の一般教育にも導入されている。

ナシ語の教育の再開によって、ようやくトンパ文字教育を実施する環境が整えられた。学校側からは、保護者に対して家庭内のナシ語教育が唱導されている。実際、中華人民共和国建国以来、麗江では社会生活において漢語が中心となり、ナシ族家庭においても、大多数の保護者が、ナシ

語ではなく漢語の能力を重視するようになっている。漢語の能力は子どもの将来の進学にかかわるのに対し、ナシ語は子どもの将来の社会進出に役にたたないというのが、一般の保護者の考え方である。

前述したように、1976年に文化大革命運動が終わり、「四つの近代化」への移行によって民族の教育も復活した。

1979年、昆明郊外では雲南省民族専門学校が「民族職業実験学校」として創設された。学校教育を活用し、就職にも役立つよう民族文化を守り育てる実用的・民族的な人材を養成することが学校の方針となっている。

この学校は需要が増え続ける社会での活躍を目指す学生の養成を目指し、地元社会からの強い要請を受け、学制３年の車修理学科と刺繍・服装学科の２学科が設けられ、それぞれに関する実践の場をつくり、地域と連携し、専門職教育を充実させてきた点は大きく、現場が求める、確かな技術が身につく人材を育てるカリキュラムを組んでいる。月曜日から金曜日まで授業を実施する。車修理学科は、通常の授業は農村経済綜合管理・農業機械使用と修理・農産品技術管理・コンピューター応用・電子商務・車販売と修理・物流サービスと管理などがあり、刺繍・服装学科は民族編み工芸品の設計・民族刺繍芸術・民族服飾製作と生産管理・民族音楽・舞踏・民族風味食品加工製作と民族料理の調理法など多岐にわたり、就職先も多方面にわたっているのが特徴となっている。

だが、訪問して感じたのは勉強一辺倒というわけではなく、専門技術のほか、言語の民族語と漢語、「職業道徳」や「教養」の授業も取り入れ、バランスのとれた学校生活というわけではないという印象を受けた。しかし専門的な技術知識を身につけ、実践を交えながらの授業を行っている。現場での実習が豊富で、たとえば、地元人気刺繍や服装のプロや調理のシェフを招いた特別実習は、学生のモチベーションを刺激する授業となっている。それら専門職を育成する学科の就職率の高い点が人気を集めている。

とりわけ、「業界から必要とされる人」「現場ですぐ活躍できる人」を育てるシステムとなっており、企業や管理部署との契約を結び、受託専門的な人材の育成を行い、就職先からは高い信頼を得ている。

このように、少数民族の文化と教育は就職と密接に繋っており、民族的マイノリティの権利保障の中で、民族語の使用や民族文化、歴史の継承を目指す少数民族教育の重要な要素であり、新たなアイデンティティーの形成に少なからず影響を与えると考えられる。

おわりに

これまで述べてきたように、雲南の少数民族地域では、それぞれの民族が豊富な文化を有する。有形・無形の文化は、民族を特徴付ける資源として形成され応用されている。やはり、民族文化の伝承活動は、中国の少数民族政策と大きく関わっていることは言うまでもない。少数民族の文

化と権利を法律で保護することは、民族の生存、発展、団結、さらには国家と社会の安定にも関わる。民族の文化遺産は法律による保護が必要である。 2001年、ユネスコは「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」を公表した後、2003年に「無形文化遺産保護条約」を発表した。現在、世界範囲で無形文化財の保護ブームが行われている。中国も近年、無形文化遺産の保護を重視するようになり、2003年から「中国民族民間文化保護プロジェクト」を稼動させ、民族民間文化の整理、調査、記録等の仕事を早足で行うようになっている。2006年に、指定保護政策を取り、中国初の国家レベルの無形文化遺産代表リストを公布した。一連の努力により、無形文化遺産の保護活動は一定の成果を収めている。

中国の憲法は、中華民族の伝統文化の多元的一体性を基本構造としている。これから民族伝統文化の特色にもとづき、民族文化を保護する一連の地方法規を制定し、経済発展と都市化が進むなか、民族文化遺産の保護は大きなチャレンジである。また、文化財の残る村、節日、民俗活動、生活習俗などの保護にも注意しなければならない。

一方では、文化資源は絶えず変貌を遂げ戦略的に活用されてきた。民族文字はそういった文化・伝統を守り続ける民族の宗教、人々の生活様式や民族性を反映したものである。故に文化自覚という意識を持つことも大事なことであろう。つまり自民族文化の来歴、形成の過程、特色と発展の傾向などをよく知っておけば、文化転換時の自主的能力を強めることができ、新たな環境に適応し、それに、新時代の文化選択の自主的地位を手に入れることもできる。

注

1、雲南民族大学の西南辺疆少数民族研究センター（中国名：西南辺疆少数民族研究中心）は、中国の教育部が2000年に全国で５ヵ所定めた民族学の人文社会科学重点研究基地の一つで、中国南部における民族学研究の拠点である。雲南の諸民族に関する幅広い研究を展開されている。

2、費孝通『費孝通民族研究文集』民族出版社1988年『中華民族多元一体格局』北京大学学報・中央民族学院出版社1989年・『中華民族研究探索』社会科学出版社　1991年など

3、費孝通（西澤治彦訳『中華民族多元一体構造論集』 風響社 2008

4、費孝通「談深入開展民族調査問題」『中南民族学院学報』1982年第２期

5、費孝通「中華民族の多元一体構造」『北京大学学報』1989年第４期

6、費孝通「潘光旦先生関於畧族歴史問題の設想」『費孝通民族研究文集』民族出版社1988年

7、松村嘉久『中国・民族の政治地理』 p 10～19　晃洋書房、2000年

8、木霽弘『茶馬古道考察記事』雲南教育出版社　2001年

9、下中弘編『アジア歴史事典』p.105　平凡社、1959年

10、王元鹿『漢古文字和納西東巴文字比較研究』p. 16～18、上海華東師範大学出版社1988年

11、方国瑜『納西象形文字譜』p. 8～11　雲南人民出版社1995年

12、孟徹理「納西宗教綜論」『国際東巴文化研究集粋』p. 93～96　雲南人民出版社　1998年

13、李嘉廷「西部大開発を迎え　雲南の振興をめざす　『北京週報』2000年第４期
14、欧陽堅「再創麗江旅游新輝煌」『為麗江騰飛―探索与実践』2003　雲南人民出版社
15、黄光学『中国的民族識別』p.61　民族出版社　1995年
16、「民族変更希望者が急増」『北京週報』第35号、1990.8.28
17、茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』p.14～19　世界史リブレット41、山川出版社1997年

（さい　しゅくふん：アジア文化学科　教授）